リステラス星圏史略
古資料ファイル
７－１－１
『 未 来 伝 承 』

（１９８０年代）
（発掘整理中）

霧樹里守 is 土岐真扉

『未来伝承』

（エスパッションシリーズ・番外）

（１）

　それは、正体不明の一隻の航宙船が地球系連邦（テラザニア）の辺境星域へと出現（ワープアウト）した、その日…

　まだこの高地平原では浅い春の、やわらかい陽射しを浴びるサンルームで、彼女は表へ出ることもかなわず揺り椅子に縛りつけられていた。

　手には祈り像。しかし何を未来視（さきみ）したいというのでもない。

　ただ、書を読むことすら医療師に禁じられた生活にあっては、漠然ともの想い、信仰する自然の諸神に一族と、そして他の民をもの平安を祈願して暮らす以外、毎日を費（つか）い潰すすべが無いのであった。

　ガラス越しに見上げる空は、わずかにかすんで、青い…

　かつて二万の民をたばねて神事を司さどった、あの抜けるような蒼天は再び戻りはしないのだ。

　周辺諸族の尊崇をも一身に集める斎姫にして族長。

　彼女も、いまは病（やまい）おもく文明の庇護の下におかれる、力弱い一人の女性に過ぎなかった。

~~　窓の外で風が鳴る。~~

~~　澄んで冷たい、黄金色の草原の風が。~~

~~　揺り椅子のなかでわずかに上体をかしげる。~~

　二人目の子を身籠った。けれどその体は驚くほど肉が落ちて、細い。

　元来が長女を産んだ時にも無理だと言われた。一族特有の頑固な不妊傾向は繰り返されてきた親族婚のため。その族長をも、むしろ純血種であるが故にこそ、見逃す筈がない。

　その、閉鎖性、排他性に民族としての先細りの将来を見越したからこそ、彼女は長（おさ）と

して部族の解散を宣言したのである。

　もはや掠奪の手から神殿を護るべき、暗黒時代ではなくなった…と。

　予言と、彼女自身の意志の力により。

　最終戦争と呼ばれる前文明の崩壊からようやく一千年の月日が流れ。世界は再び、星々へ向かってさえその束ねられた一本の腕を伸ばそうとしていた。

　表向き、彼女の部族、彼女の王国は解散し、広大な草原は民族区として地球連邦のなかに組み入れられた。

　族長としての職務はすでにない。

　人々も、徐々に流入してくる新しい教育や医療システムに慣れはじめたようである。

　親族婚を避け、異部族との混血を認める風潮も少しずつ一般化してきた。

　彼女自身、夫としたのは民の規範となるためもあって、その昔いまだ族長であり少女であった彼女のもとに連邦への投降を推めに来た、調停役のその青年だった。

　けれど…

~~　暗黒時代が去り世界全体の政（まつりごと）が整って、他部族の侵略の手から護る必要はなくなった、とは云え、神殿そのものが存続を止めたわけではない。~~

~~　それは、実は、前文明の記録を多く遺した書庫であったのだが、だからこそこれからの時代のためにも役立てなければならなかった。~~

~~　かつて人々がどのように暮らし、また滅びたものか…~~

~~　現代（いま）の世にあってそれを伝説以外に正しく知る者はいない。~~

~~　" 神殿 "と名付けてまで後の世に正しく伝えようとした、先人の意向を葬ることはできない。~~

~~斎姫としての後を継ぐべき、直系の娘が必要だった。~~

　暗黒時代が去り世界全体の政（まつりごと）が整って、" 神殿を護る民 "（アイン・ヌウマ）の必要存在理由が無くなったからと言って、神殿そのものが消えたわけではない。

　古（いにしえ）の予言はまだまだ終わらない。

　斎姫としての後を継ぐべき、直系の娘が必要だった。

　だからこそ彼女は周囲中の反対を押し切ってまで古来のしきたりにのっとって長女をこの世に出し…

　しかしその赤児を目にすると一言つぶやいた。

「…違うわ、この子ではない。」

　それは、異民族である父親の血の方を濃く受け継いだ、茶色い髪、茶色い瞳の、~~おだやかな~~大人しい、優しい娘…。

　斎姫の後裔たるもの、彼女と同じ部族特有の色素能力を、持っていなければならない。

　そして彼女は医者の言いつけを故意に破り、いま、二人目の娘が、胎内にあって六ヶ月の半ばになる。

~~「…また、お祈りかい、冴夢（サエム）。」~~

~~彼女の長い長い淡灰色の髪に、男の指がからまる。~~

~~いつの間にか、静かに彼女の夫が入ってきていたようだ。~~

~~「あまり根をつめるのは良くない。…薬の時間だよ。」~~

~~言われてみればすでに陽は傾き、みごとな残照とともに西の地平の彼方、草原の果てのかすか~~

~~な山並みへと没し去ろうとしていた。~~

~~部屋にはまた夜気を防ぐための電熱が自動で入ったのだろう。~~

~~照明の光量も明るく…~~

~~草原と谷間の民は気温と太陽の輝きで時刻を体感する。~~

~~気づけなかったのも無理はない。~~

~~礼を言って彼女は錠剤を受け取った。~~

~~心臓の負担を軽くするための薬。~~

~~……静かだった。~~

~~と、その時、~~

　彼女は無論、知らない筈のことだったが、医師はもってあと一月、と、すでにもう宣告していた。

　神事だ古えからの伝統だとか偽って民族区の奥深くへ姿を隠してしまったその前に、彼女の夫たる彼は気がつくべきだったのだ。

　戻って来た時には定期健診の眼を逃れた母体は４ヶ月に入っており、彼女は絶対に堕ろさない、と、強い瞳で言い切って見せたが…

　あくまでもその気迫に敗けたふりを通した医師達は統一者（リースマリアル）賞ものの演技力と言うべきだろう。

　その実、その時点でさえ彼女の体は、もはや中絶手術に耐え得るだけの~~体力~~抵抗力すら残してはいなかったのだ。

　先天奇型の心臓は再び母体となる負担にこたえられる筈がない。

　五ヶ月を越えてまだ起きていられる程に元気に見えるのは、ただ単に束の間の奇蹟に過ぎないのだと…

　気高い眼差しの異国の妻に笑顔で薬を届けに来た、年上の夫は、しかし甘い夢など視てはいなかった。

（２）

　連邦統合政府の奥まった一画では辺境星域〜まさに世界の最外縁〜からひんぴんに送られてくる報告に、秘かに、だが決して穏やかなどではなく、それこそ煮えるような騒ぎの様相を呈していた。

　…彼女のサンルームでいくらかの時間を過ごすうち、彼の手首で身分証が静かに音と光を発して持ち主の注意をうながす。

　滅多に使われる事のない行政~~総~~会議の緊急呼集だった。

　極東民族区の民生総局長である彼は速やかに応えなければならない。

「なんだろう？」

　ちょっと行ってくるよ、と、いつものように笑顔で、彼女の淡灰色の髪に唇づけして去る夫の姿に…

　彼女は突然、言いようのない恐怖を感じて、竦んだ。

「…待っ……。」

　けれどもそれは彼に関わる未来視（さきみ）ではない。

　正体をつかまぬうちに夫はドアの向うに消え、彼女はただひとり不安のなかに残された。

　刻々と、得体の知れない焦燥は胸に増すばかりである。

　やがて彼女は畏怖や苛立ちが外部から訪れたもの…

　何十キロもの草原をへだてた街や、さらには地球を覆う人々のネットワーク全体から発せられた動揺がそのまま心に忍び入ってきたのだったと気付く。

　顕著な感情同調の脳力は部族民の特質のひとつに数えられていた。

制（おさえ）ようのない不安。

どうしたと言うのだろう。

…病んだ、退位した、とは云え彼女の心は生まれながら人の上に立つ者のそれであり、見捨てられた赤児のような身の置き所のなさを、民心のなかに放置しておくわけにはいかなかった。

「……いったい……」

病室には彼女の神経の負担になり得るものは何一つ置いてはなく、外のニュースを得ることは不可能だった。

苦手な屋内回線をまわしてみても今日に限って、同居の両親も看護婦すらも在室していないらしく、何の反応もない。

彼達が彼女を一人にするなど普段なら考えられない事だった。

種々の~~探知機器~~検知器や電脳が壁に埋めこまれて常時監視の体制をとっていることぐらい、機械嫌いの彼女でも知っている。

……それだけ、起こりつつある事態は異常だ、ということだった。

外の人々同様の熱的な恐怖と、また、ともに冷徹な統制者としての意志力とを抱きながら、完全に二つに割れてしまった心の叫びのなかで斎姫はのろのろと立ちあがる。

長いながい、身の丈ほどもある淡灰の雲の色の髪が椅子の腕にからみつくのを振りほどいて。

…

彼女は、滅菌された病室（サンルーム）（牢獄）のドアを後にした。

（３）

　星々の群れのなかに居て、それは確かに肉眼にすらくっきりと映っていた。

　皆、街路に出て、口々に騒ぎ、叫び、怒号し、…悲鳴をあげ。

　怯えていた。

　動揺はパニックを呼んだ。

「な、んですって。そんなばかな」

　突如として辺境星域最外縁に未確認飛行物体（Ｕ．Ｆ．Ｏ）が現われたとの第一報が入ってからわずか１６時間。

　地球連邦の稚拙な跳躍技術では事故の危険をおかしてでも丸２年以上、亜光速で飛べばそれこそ１３年近くはかかるというその~~辺りから~~距離を、わずか数躍の転跳で宇宙船は地球そのものの周回軌道にのってしまった、との、報告が届いた時刻すら宙空の光点の出現からたっぷり３０分は経過した後だった。

　圧倒的な技術の差。

　たしかに、平和以外の意図があるのなら、とっくに攻撃を終えているであろうし、所詮、逆らってみても無駄な相手と言うべきだろう。

　男女二人からなる地球連邦首人は眼を見交わして窓辺を離れ、召集された行政議会の到着を待った。

　そして三日……

　各所での暴動めいた集団逃亡（スタピード）はすでに慰撫された。

けれど相変わらず金緑色の巨大な輝きは宙天をゆるやかに横切り続け…

人々はみな不安と緊張に疲れていた。

それは無論、議場にあって結論を直接に下さねばならない立場の者達にとっては一層に重いものであった。

口にのぼるのは疑問符と仮定仮説ばかり。

若い首人ふたりは議会をよくまとめた。それは亡くなった連邦統一者の血縁としての権威と信頼とに十分応えるものであり、その存在が無ければ行政委員の主だった中にさえ重圧に耐え切れず、叫び出す者がいただろう。

後アーマゲドン期千年のみならず長い人類史上でもおそらくは初めてであろう決断を下すという責任を、誰が背負い得るのだ？

辺境の植民星の人間という意味ではない、真性の宇宙人との国交を樹立するか、否か…

歴史や百年計画の全てを書き変えかねない事態を目の前に、広大な議場はむなしく湧き、また沈黙にとざされて、更に幾日もの時間を無駄に費い潰すほかは何もできないようだった。

そして、そんな彼らをさらに圧迫しているのは、自己弁護のために許可を得て地球に降下してきた宇宙人の代表使節団。

彼らの存在それ自体…。

演壇にたって~~サスタルラーナ~~自分達の世界とはの説明をなかなか達者な地球汎語でこなした後にも~~彼ら一行は厳重な監視のもとに~~議場内の宿泊施設に留まり続けた彼ら一行６人は、微妙な心理的負担の源となっているのである。

示威行動など一切しない。ひたすらに礼儀正しく控え目な振る舞いが、かえって緊迫した~~心理的な~~重苦しさを引き立ててしまっていた。

（４）

　リサーク，ケティア、対地球 全権大使はそんな有り様をけして忍耐強いとは言えない性格を圧さえてひたすら傍観していた。

　母星の利益代表として星間連盟（リスタルラーナ）政界では早くから切れ者で通していた女性である。

　燃えるような特徴的な緑の髪を首筋でふっつり切り揃えて、いつでもその群青の瞳で真っ向から相手を見据える。

　齢は、二十六という若さだったが、優秀な人材の早期の教育完了と就業を旨としているリスタルラーナにあっては、もはやベテランと呼ばれる辣腕家なのであった。

　事態は、ほぼ膠着している。

　母界を出る時の徹底的な調査によるコンピューターの勝率は７５パーセント。

　百ではない。

　常に失敗の可能性は有り得るのだ。

　彼らリスタルラーノが把握した地球人の精神特性というものは多様性に富み、喧嘩ぱやくて情熱的、進取の気風と…同時に、思想的な仲間や血縁との結束が固く、内へ内へと集まる風潮がある。

　まったくの異族である彼らを受け容れるだろうか？

　せめて…　もう少し派手に宣伝行為のできる機会があればよいのだが。

　彼らが提供し得るのは進んだ技術と知識。

　そして、彼rらはこの星の人々が未だ知らないエネルギー鉱の、採掘権が欲しい。

~~　どうしても必要なのだ。~~

……我慢、し切れず、とうとう彼女は与えられた個室のなかで立ち上がった。

行動は自重するように、と連邦首人から言い渡されてはいる。

おそらく行政議会の議場と宿泊施設のあるこの建物からは出させて貰えないだろう。

しかし…

この、中でなら。

勝率を上げる、チャンスは自分で作るものだ。

彼女は部屋の出入を監視する装置を豆粒ほどの機械１個であっさり殺し、緊張した微笑みを浮かべて、大芝居の舞台を探しにと、秘かに廊下へ滑り出た。

まだ、会議は続いている筈である。

（５）

　停滞し、休憩し、そしてまたいつ果てるとも知れず始められる混乱のさなか、彼、ジョセス・ラン＝アークタス極東う民生局長は呼び出されて議場を出、ロビー脇のテレビ電話の前にがっくりと座っていた。

　宇宙人騒ぎで行方不明になっていた病弱な妻は見つかった…とは言う。

　宙空に飛来した不思議な光点に皆が気をとられてしまっているわずかな暇に、どうしてか二十数キロは離れた都市にまでたどりつき、そこで" 侵略者 "への恐怖から行くあても知らず逃亡をはじめていた市民の暴走（スタンピード）にまきこまれたのだ。

　右上腕と大腿の骨折。全身挫傷。

　そのほか雑菌だらけの外気に触れることによって併発した種々の症状。

　医師の説明で彼に判ったのはただ、そのままでも「覚悟はしておいて下さい」と言わせた妻の病名がさらに倍ちかく増えたらしい、ということだけだった。

　なんとか赤児だけでも救けたいと、どもりがちに、彼と同じく彼女の…" 灰色の貴婦人 "の崇拝者であった医師は言う。

　しかし、無理だろう。

　はじめに彼女の状態を子供がまだ胎内にとどまっているのが不思議なほど、と形容したのは医師自身ではなかったか？

　通話を切り、けれどその場から彼は動けなかった。

　せめて…　そばについて居たい。

　が、ようやくに議事進行の糸口が見えはじめてきた今、極東諸民族数億の利益代表である彼がその場を離れるわけには行かなかった。

　それにおそらく、８時間かけて空を飛んで帰ったところで、その時にはもう…

　無駄だろう。

((　！　))

　そう、考えることに耐え切れず、彼は~~涙を圧さえた。~~声を洩らした。

　彼は妻を愛していた。本当に愛していたのだ。

「　……　どうしたのですか？　」

　広いロビーの片すみにただ一人うずくまる彼を不審に思い、声をかけたのは、緑の髪のリサーク，ケティア大使だった。

　「　え、……　」

　彼の驚きには構わず、かたわらのプリンターに打ち出されたままの病名簿（カルテ）の写しに、ついと手を伸ばす。

「お親しい方…　あなたの奥さまが？」

　気遣わしげな表情は彼にピエタを思い起こさせた。

　力なくうなづく。

「　…　そう…　」

　地球の~~先端~~医療は決して野蛮な域にあるというわけではない。

　が、しかし、やはり不治の病というものも多く残っているのだろう。

　…若い国なのだ。

（国交を樹立したら是非、医療分野での技術交流も推進しなければ。）

　まだ完璧とはお世辞にも言えない地球汎語で慣れない医学用語を読み下そうとしている時、ドアが開き、二人の~~地球~~連邦首人が随員とともに議場を抜け出して姿を現わした。

「　アークタス議員…　」

「ジョゼス。極東地区から急ぎの連絡が入ったと聞きました。奥方が危ないのではないのですか？」

「…戻っても間に合わないでしょう。もう…　」

「なんということ！　彼女の詩（うた）は…、いえ、彼女の存在それ自体が、私達とは別の意味で連邦統一の象徴でもあるのですよ。それが…」

　全面抗争ともなれば、ようやくに固まりかけていた連邦の土台を根こそぎ揺るがすに違いないと、そうまで言わせた力を持つ最後の独立部族アイン・ヌウマ。

　それを、部族の解散を宣言するという離れ業~~を演じること~~によって無血のままにおさめた神秘の女性（にょしょう）。

　退位後は、また詩人として、優れた言語学者として、各界トップの知識人層との親交を深めた。

　彼女の常に変わらない確かさは、重責を担う者達にとって心の支えともなっていたのだ。

　年若くして先代・統一者の後を継がねばならなかった、この二人の首人にしてもそれは同じことだった。

「よりによって…　こんな時節に、…」

　唇を噛む彼らの前に、

「かえって好機だったとも言えますわ。」

　リスタルラーナ全権大使は陰になっていた電話ブースから出て緑の髪をさらした。

「私達の技術なら、この病気、治せます。

　会議だの手続きだのと言っている場合じゃありませんわ。

　人の生命がかかっているのですよ。」

「リサーク大使…？！　しかし。」

「早く！　救けられる、大切な人間を見殺しにするおつもりですか。

　私達の宇宙船（ふね）の医師に、上陸の許可を下さい。」

　そして…

　" 人命救助 "の名のもとに緊急動議はあわただしく通過させられ。電送システムというリスタルラーナでも滅多に使われない離れ技でもって医師団は極東の小邸へと派遣された。

　それは、動議を提出したということ自体、ジョゼス・アークタス議員や連邦首人達の私欲（エゴ）であったのかも知れない。

　同じその瞬間に生命を落とそうとしている不治の病人など地球上にいくらでもおり、にも関わらず彼女一人を救うために行政議会全体までをも動かした、というのは。

　けれど灰色の貴婦人、勇敢な部族最後の斎姫（いつきひめ）は、古き良き地球の…そしてまた同時にそれを捨ててまで宇宙へ未来へと伸びて行こうとする人々の、確かに時代の象徴でもあったのだ。

　報道陣は彼女の劇的な蘇生と出産とを競って祝福しあい、感謝をこめてリスタルラーナの進んだ技術を讃え。

　約二十日後に行なわれた臨時の連邦総投票の結果、地球市民はおよそ六対三、棄権一、の比率で、宇宙人との国交開設を可決した。

（……そう。この娘ね……）

　それから四ヶ月して、最先端のガラスチューブで護り育てられた超未熟児がようやくに母親の生の腕にいだかれる日が来た。

　伝説の娘。

　予言の娘。

　部族" 神殿を護る民 "（アイン・ヌウマ）の隠された予言の書にはこう語っていた。

『最後の斎姫、また最後の斎姫を産む。時、宙空に光点輝やき、その娘は新しい時代の" 輪を持つ者 "（かけはし）とならん。』と。

　子供は古来の言語にのっとって咲子（さくこ）と名づけられ、父親の属する新生連邦式に、ある程度記号化された名前で呼ばれることとなった。

　サキ・ラン＝アークタス。

　後に地球＋リスタルラーナ両界のみならず、広い宇宙中に伝説として語り継がれることになる女性の、誕生の顛末である。

　翌年、地球連邦は年号を宇宙歴０１年と改称。

　ようやくに新世界体制の萌芽は始まったのであった。

星腕（リステラス）史こぼれ話・巻一
史略学士　ラン，アグラス　記す。

（草稿＆没原稿）

　星間連盟では資源確保のための国交開設を要求するに当たって、すでに地球圏の文明構造の大要に関しては完璧に資料を揃えていた。

　その調査に当たったのは連盟屈指の天才科学者マリア，ソレル博士であり、一時的に彼女の指揮下に入った保安局特務部隊の編成班であったが…

　その報告にもとづいて総会における使節派遣の決定はなされ、地球連邦首人の員数にならって大使は異例の正副男女二人とされた。

　ケティアが、正使である。副使となったエレンヌ，カイトは、名目はどうあれ単なる補佐に過ぎず、全ての権限は一方に任されていた。

（２）

（……そう。この娘（こ）ね……　）

　わずか六ヶ月半。そんなにも早期に母体から切り離されて、けれど小さな生命は着実に成長し続けていた。

　ジンコウシキュウ。

　耳慣れない言葉と、風変りな機械。

　けれどそれは我が子をたしかに護ってくれているのだ。

~~　始源の香りを色濃く残す母親は、しかし不思議に安んじて眠っていた。~~

　予言の子…　やがて伝説となるだろう、娘。

　" 神殿を護る民 "（アイン・ヌウマ）の隠された予言の書にはこう語っていた。

　最後の斎姫
　また最後の斎姫（いつきひめ）を産む。
　時、宙空に光点輝き、
　その娘は新しい時代の
　" 輪を持つ者 "（かけはし）とならん。

((　……起きなさい！))

　強く、母親は我が娘に呼びかけた。

　胎児がそれに応えて、かすかに身じろぎする。

((私はあなたに伝えねばならない事がある。語り継がれた真実（でんしょう）の数々。未来へ渡る予言。

　私は、あなたに伝えねばならないのだから。))

　そう…奇跡的に伸ばされた、はかない命数が病（やまい）に途絶える前に。

((そのままでいい。お聴き。そして…　覚えなさい。))

　斎姫は少しずつ、未だかたまりきらない柔らかい脳に刻印をほどこして行く。

　かつて、自分が選ばれた後（のち）に先代からされたと同じように、少しずつ、少しずつ、過去から未来へと続く、膨大な人々の記憶を。

「…冴夢（サエム）……？」

　夫が妻の肩にかけた手の平の重みで、深い集中は不意に破られた。

「何をそんなに喰い入るように…　まだ、長く起きていては体に障るよ。

　休まなければ。」

「まあ、もう？」

　現実に引き戻されて斎姫は秘かに嘆息をつく。

「二ヶ月も縛りつけられていましたのよ、私は。子供が無事かどうかもはっきりとは判らなかったというのに。」

「もう二ヶ月待てばこの機械から出して腕に抱けるよ。君は、一度死んだんだよ、本当に。」

「えぇ…　覚えていますわ…」

　ふっと、遥かを見つめる妻に、夫は言いようのない怖れを覚えた。

　世の中が目に見えるものだけではないのではという気になってくる。

　決して神秘主義者ではない、有能な行政家である彼が。

「　それはそうと、」

　夫の心からも妻を切り離して包む、なにか膜のようなものを突き破ろうとして彼は言葉をつないだ。

「…子供、の名前、は、決めたのかい？」

「ええ。」

　祝福し、はげますように彼女はチューブのなかへと微笑みかけた。

「とりあえず咲子（さくこ）…と。この娘はやがて別の名前で人々に呼ばれることになるでしょう。

　でも今は、部族古来の名前で。

　新しい世界を開く子供なのですから。」

~~「蘭（らん）家の咲子（さくこ）…か。いい名前だ…」~~

　鳳蘭（ほうらん）

『　SIZOKA　　』　（中学１年）

『　SIZOKA　　』　（@これは中学1年だ!!(^◇^;)と思う☆）
2007年4月30日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

　その日、後に“地球の目覚めの日”と呼ばれることになる四月三日。
　地球と、月を始めとする十一の太陽系内開発都市、および七つの系外開発惑星の路上には人っ子一人見当りませんでした。
時に地球平和歴五十三年。
最終戦争後何百年にも渡った無政府状態に終止符が打たれてから半世紀が過ぎ、新しい地球統合政府による計画的で安定した政治は人々に輝やかしい未来を約束していました。
　そう、万事が“計画”に基づいて順調に進められていたのです。
地球統一者リースマリアルの後、歴代の連邦総長が全力をそそいだのは、いかに予定どうり“計画”を実行するかということでした。
　ところが、突如、“計画”を計算する際に予測されなかった一大事件が持ちあがったのです。
そう。ーダースにものぼる恒星系に足をのばした地球人たちが今だにその気配さえ感じとれず、若者や子供らの夢の中にしまわれたままだった――宇宙人。
彼らが現れたことによって予想、いや計画されていた地球人類の未来像が大きく変わることになったのです。

『　（無題）　』　（@中学2年。）

2006年12月15日 連載（2周目・地球統一〜ESPA） コメント (1)

平和暦43年4月1日
わたしたちはわたしの妻サエムのために
騒々しい集中管理都市（ドーム）を離れて
別荘で暮らしていた。

サエムは生まれつき体が弱い上に
長女サユリの出産で心臓をこわし
5年たっても回復の見込みがたたないままに
次の子供を産もうとしていた

彼女は知らなかったが
彼女には中絶手術に耐えるだけの
体力もなく
まして出産や心臓移植など
考えるだけムダだった

今思えば妊娠8ヶ月まで生きのびていたことすら
奇跡に近かったのだ

彼女は彼女自身も知らぬうちに
一歩一歩　着実に死へ向って歩いていたのだった――

（擬音：キィッキィッ　キィッキィッ　キィッキィッ）

（揺り椅子に腰掛けた妊娠後期の女性の横顔、クローズアップ）

夫「なにをしているんだいサエム、薬の時間だ。

……サエム？」
妻「あ……」

（ピクッと動く右手の中に守り像）

夫「なんだ、またお祈りかい。
あまり根をつめるのはよくないぞ」

妻「だって、あなた――
お料理もそうじも、本を読むのまで禁止でしょ。
他にやることがないんですもの……」

（守り像のアップ）

妻「心臓に負担をかけないためだってことは
よくわかっているのよ。
でも――」

（夫の持って来た薬を飲みながら）

妻「わたし――、本当に産めるのかしら」

（ギクッとする夫）

夫「……サエム……」

妻「！いやね、あなた。そんな顔しないでよ。
だ・い・じょ・お・ぶ。
ちゃあんと産んでみせるから――、ね？」

せっかくあなたが承知してくれたんですもの、
堕ろさなくちゃいけないかと思っていたのに。
――ね、男の子がいい？　女の子がいい？
上が女の子だから今度は男の方がいい？」

夫「丈夫でありさえすれば、どっちだって可愛いものさ」

妻「……あなた?!　どうかなさったの？」

夫「いや！　なんでもないよ」

（慌てて首をふる夫）

妻「ごめんなさい。
わたしが病弱なばっかりに
心配ばかりかけるわね……」

（壁に埋め込まれた端末画面が、
ヴーンヴーンヴーンという音とともに自動で回線開く。）

（擬音：　ヅヅー！）
（壁の端末と、夫の腰のベルトに装着した通信機と、
同時に同じ音声）

声「地球および各惑星の
星間統合政府全役員!!

緊急臨時総会を開きます
5時間以内に最寄りの
臨時総会会議場へ集合して
下さい!!」

夫「！」

声「くりかえします!!
星間統合政府役員は
全員5時間以内に……」

（擬音：カチッ）
（夫、腰の通信機を切る。）

夫「なにが起こったんだろう……
とにかく行ってくるよ」

妻「――あなた」

夫「ん？」

（妻の父、幼女を抱いて、画面の隅より「スッ」と入室。）

父「呼び出し（コール）を聞いたかね、トキヤ君」

夫「あ、お義父（とう）さん。すぐにしたくします」

父「いったいなにごとだと思うかね」

夫「さぁ……」

（幼女、祖父の腕から「トン」と降りる。）

妻「あ……」（部屋から出て行く夫を呼び止めようとするが、
間に合わない）

（場面転換。家の外。外出できず、窓から見送る妻の遠景）
（孫娘を抱いて見送りに出る妻の母と、扉を開けたエアカー）
（上着を羽織りながら、先に乗り込む義父）

夫「――じゃ、行ってきます、お義母（かあ）さん。
いい子にしてるんだぞ、サユリ」

娘「うん♪　いってらっしゃ～い♪」

※　無地の大学ノートにシャーペン描き
（下書きや絵コンテなしの一発書き!!）による、
未完のストーリーマンガより、ネームのみを抜粋　※

.

コメント

りす

2006年12月15日22:55

注：

初期設定なので、夫の名前が違っているうえに、
妊娠出産に関する描写が、非常に古典的です。

しかも、後の設定では非常に重要な、
歴史上のキーパーソンとなるサエムが、
この時点ではたんなる「議員の娘で議員の妻」
に、すぎなかった、ような気がする……

(^◇^;)”　　「作者」の、思想的未熟さが、モロ出しですね☆

プロローグ　（サエム夫人に陣痛が始まった）　（@中学または高校1年時？）

『　（創作ノートより）　（2）　』
2007年4月5日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

プロローグ

三月末日……深夜。
地球系星間連邦議会の特殊臨時総会に出席していたアークタス議員は、会議の合い間に呼び出しをうけ、自宅の主治医からかかってきたテレビ電話に出て……愕然とした。
彼の妻、サエム夫人に陣痛が始まったと、言うのである。
そしてそれは、とりもなおさずサエム夫人の死を意味することだった。
生まれつき病弱で、加えて長女サユリの出産の際に完全に心臓をこわしてしまったサエムには、出産などはとんでもない。三ヶ月の時点での中絶手術にすら、耐え得るだけの体力がなかったのである。
すぐに帰って来いと医者は言った。あたりまえである。
が、アークタスは必死の思いで首を振った。
全地球系連邦の行く末に関わる会議中に、たとえどんな小さな地域のであろうと、その代表であるのに、自分の家族のことで仕事を放り出すことはできない。
かつて恋の上での競争者（ライヴァル）であり、今も変わらぬ親友のドクター・ヤマはこのひとでなしと思いきり怒鳴って、たたきつけるように電話を切った。
現在サエムは妊娠6ヶ月目である。
それが陣痛と言うのならば、それは、多分、異星人来襲のデマに怖えて、ショックを受けたのだろう。
――そう、異星人。
異星人（リスタルラーナ）は、確かに来ている。
会議再会10分前のベルが、議事堂全体に響きわたったとき、アークタスは精神的な打撃ですっかり平衡感覚を失くしてしまった脚と体を、かろうじての所で壁にささえていた。
____だが、それがどうだと言うのだ？
サエムはもう死ぬのだ。　死・ぬ・の・だ!!　……自分のせいで。
彼は打ちひしがれて自分の議席へと戻って行った。
そんな彼の姿に不審を抱いて、何が起ったのかと受けつけに尋ねていた男がいることも知らずに。
その男は、わけを聞くとすぐ、その場でアークタスの自宅へと電話を入れ、出てきたアークタスの義父母から、サエムの病名と容態とを詳しく聞きだした。

「どこへ行ってらしたんですの、ダーナーさん？」
ケティア・サーク大使が、例のつっけんどんな調子で問いただした。
「今はあたくしたち一人一人がリスタルラーナ星間連盟の代表なのだってこと、お忘れになったようですわね。あまり不審な行動はとらないでいただきたいわ。」
ケティア・サークは25歳。同僚のカート・エレンヌ大使と共に、リスタルラーナ星間連盟を代表して、二年間の宇宙旅行の末、国交樹立のための全権大使として地球へやってきたのだ。
どちらの国家にとっても、異星人との接触は始めてのことである。
神経がピリピリして、つい文切り口調になるのも無理はない。
が、それだけではない。
もともとケティアはキャプテン・ダーナーをけぎらいしている。
理由はと言えば、2年の航海を通じて彼が一度でも笑うのを見たことがないというだけのことなのだが、それは彼女に言わせれば「人間として重大な」情緒欠陥であり、「笑わない人間を見るとゾッとする」のだそうだ。
あいかわらずムスっとして口を利かないダーナー船長に向ってケティアはいせいよくまくしたてているが、まあ、所せん相手が悪い。てんから無視して何か考えこんでいる様子を見て、ケティアのぐるぐると元気のいい赤っ毛は、文字通り怒髪天をつかんばかりになった。
くすり、とカート大使が笑うと、すかさずケティアのあなおっそろしいひとにらみが飛んでくる。
「なにがおかしいんですのっ!!」
「え！　あ、いや……」
カートは慌てて手を振った。
「そうではないんですよ。ただ……」
「ただ?!」
「その……あなたのように気性の激しい女性（ひと）が、よく外交官をやっていられるなぁと、……あ、いや！」
前々から思っていたことでもあったので、つい本音が出てしまい、カート大使はあわてて口をふさがねばならなかった。
ケティアの方はと言えば、最大級の侮辱を受けとって、（とは言え、言った本人はむしろ好意と賛美をもってのことだったのだが。）、その髪の毛よりもまっ赤にふくれあがったあげく息がつまって黙りこんでしまった。
26歳独身のカート大使が、この失策（ヘマ）を大いに後悔したことは言うまでもない。

一行が今いるのは、地球本星にある連邦本部総会議場のVIPルームの一つだった。
本来ここは司法局長_____の専用であるのだが、連邦本部にかつて来賓というものの来たためしもなかったため、彼女がどうぞと言って開け渡したのだ。
最高頭脳の一人の部屋にしてはつつましい調度で、国のしくみの根本を司（つかさ）どる女

性の、その人となりがうかがわれた。
　青い服でしっとりと部屋の中に溶け込んでいるような彼（か）の女性（ひと）が、一行を迎え入れた後に一礼して部屋を辞す時、ケティアは部屋を占領（のっとっ）てしまった事に対して、ひどくうしろめたいものを感じた。
　とにかく彼女らが地球にやってきて丸二日、敬遠して口をきこうとしない者も、屈託なく親しげに微笑みかけてくる者も、様々いたが、総じて若手の多い政府要人の全てに、一見して、すなわち「誠実な人」だという印像を与えられ続けているのである。
　これは、自国（リスタルラーナ）のひとくせもふたくせもありそうな政治屋（たぬきおやじ）ども相手とは、大分勝手が違うな、と、正使のケティア・カート始め、大使一行のだれもが感じた。
　相手（むこう）が私情を交えず直截に話しかけてくる以上、こちらも腰をすえて、腹蔵のないところを答えなければならないのである。
　「いや、若い国なんですよ。若い国なんですねえ」
　カート大使は、また妙な所に観点をすえて、しきりに感激しているようすだったが、ケティアはと言えば、自分のような若輩の、しかもだれからも言われるように感情が豊かすぎて、かけひきや腹芸の苦手な、外交官としてはかなり型破りな人間がわざわざ正使に指名されたりしたのは、その辺が理由だったのかしらんと一人で納得した。

　さて、一行がここで何をしているかと言えば、待っているのである。二日前に地球連邦の勢力範囲に到達し、その時点で連邦政府との正式な交信（コンタクト）。半日後には一応歓迎という形で地球本姓への着陸を許可されて、各星間にとびかっている異星人来襲のデマを鎮めるため、ということで、ぶっつけ本番同様に、政府専用の通信帯（チャンネル）を通して、全星域に向けて『友好の辞』というものをしゃべるはめになった。
　その後、今朝方の事だが、夜どうしかけて集まってきた全議員の前で、リスタルラーナ代表として言うだけのことは言い終えると、ハードスケジュールにかえって地球側の方が同情して、「正式な宿舎が決まるまで」、このVIPルームでお休みを、と、事の次第が運んだわけである。
　総会議場では、30分の休憩の後に今しも「国交を開くべきか否か」についての大論戦が再回されようとしていて、使節団一行は備えつけのパネルで、その様子――賛成・反対のどちらの意見に傾くか――を、かたずを飲んで見守っているわけだ。
　が、何か手違いでも生じたのか、休憩時間を5分まわっても、内閣の主要メンバーの入場がない。
　「おそいわね」
　ケティアがイライラした様子で椅子のひじかけを弾（はじ）いた。
　10分たった。なかなか始まらない。
　カート大使は不意に言いだした。
　「　　さん、先程はどちらへいらしてたんです？　特に行動を制限されているわけではないですが、やはり責任者としては知っておきたいので……」

ケティアとはうってかわった、落ちついて丁寧な言い方だ。
「ふむ……」
は、相かわらず無愛想な声でぶすっと言った。

マリシェーラ・ダエイン
ヤスルミ・ダエイン

２．（シゾカ・第三ドームシティの郊外。）　（中学２年）

『　エスパッションシリーズ・超少女たち　（2）　』　（@中学2年生？）
2007年4月2日 連載（2周目・地球統一～ESPA）

2.

ユーラシア大陸、極東。海に面したシゾカ・第三ドームシティの郊外……。
かつて――一千年前までは、そこには巨大な休火山がそびえていたのだという。最終戦争の時に地殻破壊兵器の余波を受けて、今は跡方とて無いが。
崩壊した百万都市の上に火山灰が降り、次いで何万tという土砂が雪崩れ落ちた。雨が降り、土中の人々の死骸が分解し、雨が降り、初めての草が芽生えた。小百合は一度だけ、その恐ろしい話を淡々と語る母の口から聞いた事がある。今、そこには見渡す限りの原野の花園とそれに続く豊かな後背丘陵。かつての汚濁にまみれた広大な湾をも数百メートルの地下に眠らせて、“地球統合政府”の手による若々しく美しいドームシティの建設が進められている。そして――……
シティの郊外の外れ、後背農地の開拓もここ当分は行なわれないであろう、大自然との狭い目に、その家は建っていた。

――……姉、蘭小百合（ランさゆり）、六歳。……
小百合は、いつもガラス越しに母さまを見ている。いつもいつも見ている。母さまは蘭（ラン）冴夢（サエム）、二十九歳。十八で結婚し、二十三で無理と言われていた出産をしてからは、すっかり心臓を弱くして、殆ど毎日が寝たり起きたりである、長い美しい灰色の髪をした婦人だ。小百合は寂しくなると必ず、母さまのいるサンルームの前の庭に出てきて部屋の中の彼女の似顔絵を描く。
切れ長の、いつも彼方を見はるかしているかのような灰色の眼。ぬけるように白い肌。すらりとした長身にかならずまとっている青灰（あおばい）色の祭司の服。――いつもゆったりと揺り椅子に腰かけてお祈りをしている。時折り小百合の方に眼を向けて、微かに笑う。
母さまのお腹が少しづつ大きくなっているのが自分の妹の為だなんて、小百合は少しも知らなかった。周囲の大人達が知らせようとしなかったからだ。何故なら、それはtだ妊娠初期に肺炎を併発していた冴夢には中絶手術に耐え得るだけの体力も無かったというだけの事であり、三ヶ月後にひかえた出産は、妹よりは母の死を子供に与えるだろうと思われていたからだった。
小百合はそんな事は知らない。大好きな母さまは御病気なのだ。だから無理を言って困らせてもいけないし、母さまの見える所で心配をかけるような危ない遊びをしてもいけない。いつも学校から帰った後は、母さまのいるサンルームの前の庭の中で、宿題をしたり母さまの絵を描いたりして過しているのだった。
冴夢が妊娠している事が判明してからは、彼女はずっと無菌室に改造したサンルームの中で暮らしている。お医者様はその消毒機構が子供にはよくない影響を与えるからと言って、小百合が

中へ入るのを認めてくれなかった。だから小百合はもう半年以上も、母さまの腕に抱いてもらっていない。……

　三月二十七日、その日、蘭冴夢は既に彼女の職とも言うべきものになっていた“祈り”をも忘れて、一心に心眼を凝らしていた。
かつて味わった事のない不可思議な予感――奇妙に恐しいような、なつかしいような、胸騒ぎが心の中を一杯に占めていて、とても精神を統一して祈るどころではないのである。
その感じは、朝、目覚める以前から意識の片すみを刺激し続けて、冴夢に何事かを告げて止まないのだ。“何か”が近づいて来る――何かが。
しかしそれがどんなものであるのか、果たして善いものであるのか、悪いものであるのかさえ、判断する事ができない。
幼ない頃から“部族”の語部（かたりべ）＝神官として霊感の強さを得ていた彼女にしては、それは生まれて初めての経験だと言っても過言では無かった。
　夫ヨセフィア・アークタスは、小一時間程前に地球統合政府からの緊急呼び出しを受けて出掛けて行った。彼はシゾカ・シティ区域代表の総会評議員なのである。
――まったくだし抜けに臨時総会が招集された。……もしかしたら冴夢の予感も、何かその事に関係があるのかも知れない……。
　彼女は再び目を閉じて意識を瞑想レベルにまで拡大させた。自己の内外に漂う全ての情報を捜査・点検して、何とか一刻も早く不安の源を突き止めようとする。
もうこれで朝から幾度目になるのだろうか？　日頃の“祈り”でさえも実の所は医師から止められている程精神の統一を必要とするものなのだが、それでも今日のこれの比ではない。だが冴夢（サエム）は、例え著しく精神エネルギーを消費してしまう幽体脱離や未来予知を行なわねばならない事になろうとも、必ず自分が感じているものの正体を見極めて見せるつもりだった。
夫が留守であってかえって良かったのだ――彼女は息を緩めたほんのちょっとの隙に、自分のふくらんだ腹部に手を重ねて思う。
心配して必ず止めに来たであろうから。
　彼女――蘭冴夢は、様々な意味での素晴らしさを併わせ持つ女性だった。
“地球統一者”である、かの人リースマリアルが四十二歳の若さで他界されて十年。今、地球及び太陽系内・系外の何処を探そうとも、冴夢より深い教養と天性の気高さとを維持している者は他には居ない――と、病弱の為広く世間に出る事はせずに家に引きこもって暮している彼女に対して、名だたる学究や施政家達が賛意をおしまない。
まれにその風評を聞きつけて、若さにまかせて彼女の実態なるものを観破すべく押しかける若者達も存るが、その大半は以後彼女の謙虚だが決して物事に動じない静かな眼の色に魅かれて、秘かに師と仰ぐようにさえなるのだった。
　滅多に汗をかく事のない彼女の全身がじっとりと重く熱い湿り気を帯び、レッドアウト寸前になった額を指で支えながら、冴夢は懸命に整息法を行う事によって失神状態に陥いる事を防ごうとしていた。

何かが「見えた！」と思った瞬間に、心臓発作が彼女を襲ったのだ。「何か」は一閃して水面下に消える銀のうろこの魚のように、彼女の心の届く範囲からは姿を消してしまっていた。おそらく二度と再び捕える事はできまい。
　彼女は「絶望」に近い感情の逆巻きに足をとられてしまった様だった。
“何か”――がやって来る。何かとてつもない大きな波動、歴史を揺り動かす嵐のようなものがやって来ようとしているのだ。その最初の波は彼女をその渦動の中に抱き込み、未だ胎内に眠れる彼女自身の「約束の子」の一生に何か途方もない方向を付与してしまうだろう。波は今正に冴夢の頭上で砕け落ちようとしているのだが、彼女はその本質を見失ってしまったのだ――永遠に。
　ずるずると滑り落ちるように絶望の暗黒の淵に向いながら、蘭冴夢はいつの間にか泥沼の眠りの中へと引き込まれて行った。

３．（シゾカ市（シティ）の全ドーム群が一斉に喚き立てているような喧噪の中）　（中学２年）

『　エスパッションシリーズ・超少女たち　（3）　』　（@中学2年生？）
2007年4月3日 連載（2周目・地球統一～ESPA） コメント (1)

3.

　彼は混乱を極める市街の、既にこの騒ぎの余波で異常を来たしたものか数メートル進んではガクガクとベクトルに変調を起すロードベルトの上で、とにかく目をむいて前方をにらんでいた。
シゾカ市（シティ）の全ドーム群が一斉に喚き立てているような喧噪の中では、他に何をしようにもする事が無かったのだ。
怒号、悲鳴、火の付いたような子供の泣き声。山のような荷物を抱えて路上に湧れ出した大群衆の間で、これも狂ったように警報を鳴し続ける空陸両用車（エア・ジェット）の長蛇。
千年の星霜を経てようやく再統一が為されたばかりというこお地球上に、まるで再度最終戦争（アルマゲドン）が訪れたかのような光景である。
それでも彼はとにかく手荷物一つ持たない全く平静なスタイルで――冷汗じみた油汗を顔じゅうににじませてはいたもの――かなり有効なコース選択を行って一路郊外を目指していた。

（未完）　.

コメント

りす
2007年4月28日3:15

　……で……。

　「4月3日」というのは、この騒ぎの中、
　わが長女（w）「サキ・ラン＝アークタス」が、
　無事（？）に産声をあげた、記念すべき誕生日。
　で、あったりしたりして……　＜何年後のだ？

(^_^;)(^_^;)(^_^;)(^_^;)”

（設定資料）

（借景資料集）

リステラス星圏史略
古資料ファイル
７－１－１
『未来伝承』

http://p.booklog.jp/book/116437

著者：霧樹里守 is 土岐真扉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/116437

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト